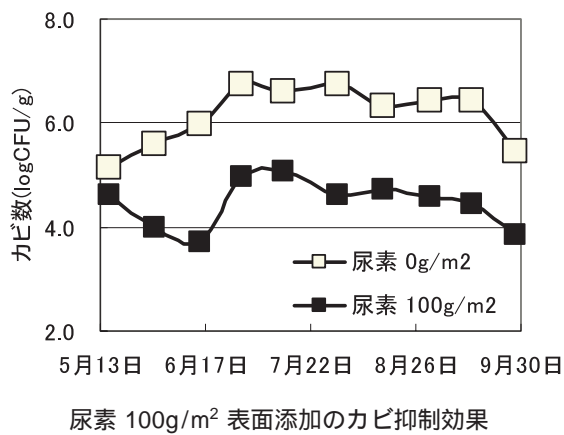


Topics

肉用牛に対するでん粉粕の飼料利用

北海道では年間約10万トンのでん粉粕が発生しますが、蛋白質含量が低く、貯蔵中にカビが発生しやすいため飼料として利用は進んでいません。そこで、でん粉粕に尿素を添加し、これらの問題を解決する技術について検討しました。

でん粉粕の表面1m²あたりに尿素を100g散布すると、カビの発生が抑制できました。表面散布ではなく、尿素0.5%を混合添加調製により、蛋白質の改善にもつながりました。配合飼料の2割をでん粉粕サイレージに置き換え、黒毛和種を30ヶ月齢まで肥育した結果、平均で420kg以上の枝肉重量が確保でき、BMS No.などの格付成績も配合飼料で肥育した対照区と同等でした。



でん粉粕サイレージを給与した牛の肥育成績

項目	でん粉粕区	対照区
頭数	5	6
出荷体重, kg	694.4	716.7
日増体量, kg	0.77	0.81
濃厚飼料摂取量, kg 乾物	3974	4630
粗飼料摂取量, kg 乾物	597	547
枝肉重量, kg	423.6	441.3
ロース芯面積, cm ²	49.8	53.5
バラ部厚, cm	7.2	7.4
皮下脂肪厚, cm	2.5	2.8
BMS No.	5.2	5.3

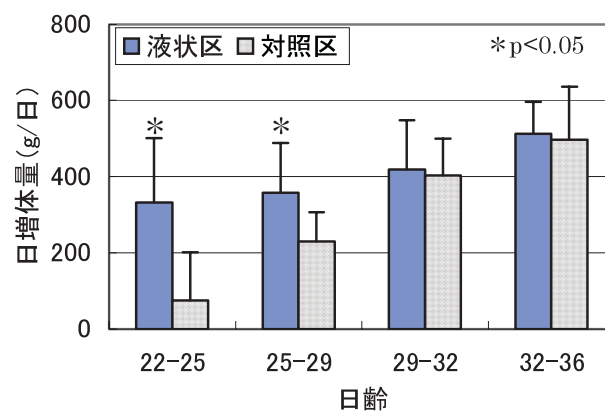
液状飼料給与装置を用いた離乳子豚の飼養技術

離乳子豚は、粉状の飼料より液状の飼料に対して嗜好性が高く、液状飼料の給与により離乳子豚の餌付けが容易になり発育停滞を改善することが期待されます。そこで、液状飼料給与装置(Förster Technik社製:市販の粉状人工乳飼料を温湯で液状化して給与する機械)を用い、離乳子豚に対する液状飼料の少量多回給与(1日最大24回)を行いました。

その結果、生後14日齢で離乳した子豚に2週間継続して液状飼料を1日12~24回給与することで、通常に管理した子豚(生後21日齢で離乳、その後粉状の人工乳を給与)より肥育終了時の日齢が約10日短くなりました。また、生後22日齢の離乳子豚に液状飼料を給与した場合でも、粉状飼料を給与するより離乳後1週間の発育が改善されました。



飼槽から液状飼料を摂取する子豚



液状飼料を給与した22日齢離乳子豚の日増体量